

内外教育

2014年(平成26年)3月7日(金) 第6317号
(購読料金 月額税込み4,200円)

●昭和21年12月12日 第3種郵便物認可 ●毎週2回火・金曜日発行
(但し祝日等を除く) ●発行所 〒104-8178 東京都中央区銀座
5丁目15番8号 時事通信社 ©時事通信社2014
誌面内容に関するお問い合わせ(編集部) educate@grp.jiji.co.jp
ご購読に関するお問い合わせ(業務管理部) dokusya@jiji.co.jp



時事通信社

目次

〈あすの教育〉
山本健慈和歌山大学長に聞く
観光学の高度人材養成へ……………2~3

〈モンスター・ベアレント論を超えて〉
第166回 学テ競争曲と人見悟空
教委改革の岐路 (9)
小野田正利・大阪大学大学院教授……………4~5
児童生徒の自殺、学校が全件調査
指針改定の骨子を策定——文科省専門家会議
……………6~7

〈特集〉
ボランティアで自尊感情
全国高校教頭・副校長会の研究集録(下)
……………8~9

〈時評クオーターリー・冬〉(12~2月)
揺れる教委改革案、法案の提出へ……………10~12

〈アンテナ・スポット・インサイド〉▷大川小検
証委が報告書提出▷中学教頭、女子高生狙い下半
身露出▷三重の中3殺害、18歳少年を逮捕▷県立
校教職員を防災士に▷教育監を新設▷東北福祉大
に医学部構想、など……………13~15

〈文科省三役の定例記者会見・抄録〉
2月28日(金) 下村博文文科相……………16

〈評の評〉2月の新聞
教育委員会改革を論じる……………17~18

〈教育法規あらかると〉
インフルエンザワクチンの集団接種……………19

〈ラウンジ〉教委制度の改革は慎重に……………20

教育委員長は「お飾り」か——京都造形芸術大学教授・寺脇 研



いよいよ、新しい教育委員会制度が生まれる見込みだ。教育委員会の独立は担保されるものの、首長の関与が一層強まることになるだろう。果たして政治的中立性が担保できるだろうか。

実は問題はもう一つ。現在の教育委員長と教育長の仕事を兼務する「新教育長」が、教育の最高責任者となる点も見過ぎすわけにはいかない。

かく言うわたしは、教育長を務めた経験がある。今から約20年前、新しく当選した藤田雄山知事の要請で文部省(当時)から広島県教育委員会事務局へ出向し、教育長に就任した。

既に初等中等教育局の課長だったし、それなり

の行政経験を積んでいるとの自負はあった。しかし、広島県の歴史や地域事情、人脈が皆目分からないう。その面を完璧にカバーしてくれたのが平田嘉三教育委員長である。広島大学教育学部名誉教授で広島県の教育に誰よりも通曉した方だった。

懇切丁寧な現地事情説明に始まり、県内教育関係者に新顔のわたしを馴染ませ、果ては県議との顔つなぎまで、七十近い委員長は、まるで慈父か老師であるかのように四十そここの新米教育長の面倒を見てくれた。こちらも、制度改革、教職員人事、組合対応などあらゆる案件を、教育委員会に諮る案の策定前に逐一委員長に相談してご意

見を伺ったものだ。そのおかげで、任期中の教育行政を何とかスムーズに運営できたのだと思う。「お飾り」呼ばわりされ、こんなもの不要とばかりに教育長と職務統合される教育委員長の役割は、そこに人さえ得れば決して軽いものではない。むしろ、首長、教育委員長、教育長の三者が政治、教育、行政の立場で互いに機能補完し、支え合うことこそ、教育委員会制度の最も理想的に作動する形だろう。

人選や運用が拙いからといって制度のせいにするのは筋違い。どのような運用がなされるべきかの徹底した議論もなしに制度いじりに走ってしまったけれど、果たしてそれでよかったのだろうか。





山本健慈和歌山大学長に聞く

観光学の高度人材養成へ

和歌山大学(和歌大)は、2014年度に大学院観光学研究科博士課程を設置し、国立大学では初めて学部から博士課程までの一貫した観光学教育を提供する。学問の世界では比較的新しい分野だが、日本も諸外国が先行する観光産業振興への取り組みを強化する中、観光に特化した高度な人材の養成を目指している。山本健慈学長に博士課程設置の背景や、今後の和歌大の方向性などについて聞いた。

■「象牙の塔」打破した博士課程に

——観光学部を博士課程を設置する背景は。

欧州などでは観光産業が重要な部分を占めているが、日本も成長戦略の重要な柱に観光産業を位置付けた。この産業を担う、特化した人材が必要だということで、和歌大は学部と修士課程をつくらせてきた。文部科学省との折衝過程では、博士課程を設置することで、和歌大を日本における観光学研究の国際的な拠点とするという方向で一致した。

博士課程には、学部や修士と違った意味合いがある。観光政策立案や国際的な事業を新しく展開

できるような高度な人材の養成を目指している。観光学は経済経営、地域、文化財、歴史、芸術など諸科学を基礎にしつつ、観光に関わる諸現象を学際的に考究するという性格を持つ。これまでの個別専門領域を深く掘り下げるというドクターとは違った人材を養成する必要がある。

例えば、先日、韓国のある地域の観光広告を見ていたら、その自治体の責任者は「地域再生博士」の称号を持っていた。日本政府や自治体、観光関連企業が、今後、国際的な規模で観光政策や事業を展開することを考えた場合、その責任あるポストに就く人は「観光学博士」であることも想定しなければならない時代ということだ。



インタビューに答える山本学長

——どんな博士課程のプログラムにするのか。

これまでの日本の博士の世界は、現実実務の世界と隔離されたいわゆる「象牙の塔」の象徴だと思われてきた。和歌大が目指すのは「高度な実務家」、あるいは「豊富な実務経験を基礎としたアカデミズムの担い手」。日本の社会科学系の博士課程教育が持つ閉鎖性を打破するモデルとして、文科省からも期待されている。

観光学は学際的な学問なので、1人の学生に対して多様な分野の専門家などが複数で指導する。集団的な教育体制を採ること、教える側の研究者も、個別分野から脱して学際的な研究者に変革されることが期待される。

■人生の目的見つけ、意欲的な学びに

——和歌大の使命は。

国立大学は、どこも今「ミッションの再定義」の途上だ。和歌大の場合、観光学部は国際的拠点、教育学部は教職大学院構想の具体化、システム工学部はイノベーションを担う「理工系人材育成」というミッションが明示された。経済学部は、戦後を通じて日本の企業社会の担い手を輩出してきたが、私学経済学部の規模拡大の中で、地方国立大学の学部としての役割が問われている。

地方国立大学の「ミッション」として、どれだけ学生が地元で就職しているかと聞かれるが、県内の企業数は少なく、量的には県外企業への就職が多い。しかし、和歌山の主要企業などにはしっかりと就職している。

和大的教育として強調したいのは、和歌山は、若者が育ち直し、人生に意欲的に立ち向かう活力を得る場として可能性があるということだ。09年8月に学長となった際に、当時の文科省の事務次官に「どういう大学にするか」と聞かれて、「今の学生は18歳まで貧弱な体験しかしていないために、学ぶ意欲、生きる目標を見失っている。育て直して社会に出す」と言った。せつかく大学に入ったのに、休退学が少なくなる。

和大的保健管理センターでは、引きこもりの学生を回復させる支援の実績を持ち、支援プログラムとシステムを確立してきた。7年も8年もかかって卒業し立派な社会人として活躍している例もある。これには地域の人の支援が大きな役割を果たしている。彼らは人に接して生きる意味を改めて見いだせるようになった。例えば東大のように非常に都市化されたフィールドではできないことも、和歌山のように自然や人情が残ったところではできる。

今、学生を「ゆとり世代」だと言い「学力不足」を非難する世論があるが、これを若者の責任のように言うのはフェアではない。大学入学までの教育制度は、若者から、人生でこういうことをやりたいという好奇心を、厳しく言えば抑圧している。人間は全て個性的で多彩な存在で、興味を持ち方もさまざまだ。これをしっかりと伸ばすシステムに残念ながらなっていない。

だからこそ、大学では自分のテーマを自分で発見させる。アルバイトでも、フィールドワークで

も、自分の人生にとって切実なテーマを見つけさせるのが大事だ。世の中にどう役に立つか、どう評価されるかなどという以前に、自分の幸せを実現するためのテーマを見つけさせることが大切だ。

——自分のテーマを見つけさせる方策は。

例えば図書館の大改造を行い、互いが刺激して話し合えるような空間にした。和歌山の農村に連れて行って住民の話に耳を傾けさせたり、タイに派遣して異文化・異世界の刺激を受けさせたりもしている。東日本大震災の時も「学生ボランティアは迷惑だ」といった議論もあったが、「ともかく行け」と送り出した。学生は18歳までの家族や学校という管理された世界から解放され、「生きた世界・人」に出会うことで、学び行動を始める。

■学生育成にエネルギー傾注

——政府が議論している入試改革をどう思うか。

入試を変えることで高校までの教育も変えたいという期待は理解できる。そうあつてほしいと思うが変わらないのではないか。大学入試も、小中高の教育の在り方も社会の人間観の反映だからだ。センター試験の代わりに達成度テストを導入して点数を段階別のグループで評価するというが、入試の1点刻みに意味がないのなら、今の全国学力テスト（全国学力・学習状況調査）で点数を公表して競い合わせようという文化はどう考えるのか。

入試改革は、新しい方法を導入するコストが大きく、人間も相当必要。現行の入試がいいという

訳ではないが、入試改革や教育制度の議論は、「生まれてから青年期までのヒトを人間としてどう育てるか」という筋道で議論することが重要だ。私は、どんな入試であれ、受け入れた学生をしっかり受け止め、育てることに全教職員が努力する方にエネルギーを傾注したい。

——国への要望は。

中央教育審議会は、大学改革のために学長にリーダーシップを発揮しろと言っている。学長は、教授会の議論に縛られ、選挙での投票権をもつ教員らの顔色をうかがい、それがリーダーシップを阻害しているなどと心配しているようだ。私の経験ではそんなことは全くない。自分の構想力の貧困は痛感するが、多くのベテラン、中堅の教員、幹部職員がそれを補強してくれている。

大学ガバナンスなどの制度改革をするなら、大学の規模などによる実態の違いをよく研究し、実際の経営の現場を激励するような方法を考えるべきだ。

国立大学の困難を最も知るのは学長経験者だ。OB学長が中心となった「高等教育の未来のための社会運動」が必要だと思う。

【横顔】1948年生まれ。山口県出身。京都大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。77年に和歌山大学に着任し、95年に教育学部教授に。生涯学習教育研究センター長等を経て09年8月から学長。長く「大人が育つ保育園」といわれるアトム共同福祉保育園の経営に関与。

（武司智美II和歌山支局）